
不幸の黄色い魔導師

黄衣の僕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸の黄色い魔導師

【Nコード】

N3448BA

【作者名】

黄衣の僕

【あらすじ】

神の子は恵まれている。誰かがそう言った。しかし、この少年・わしだりつ驚田栗を見てもそう言えるだろうか。これは、神の子の身でありながら不幸に苛まれ、それを退けるために奮闘する少年の物語である。

ブローグ

黄色は幸せの色。

僕は黄色が好きだ。

黄色いチーズが好きだ。

黄色い花が好きだ。

黄色い太陽が好きだ。

でも、何でだろう。好きな筈の色なのに、好きな筈なのに、どうしてこうも虚しいんだろう。胸に大きな穴が空いて、そこを風が吹き抜けるみたいに嫌な気分だ。どうしてこうも、

悲しいんだろう。

そこは、無名の次元世界だった。年中を通して火山活動が活発であり、所々に溶岩の河が流れており、そこに住む生物達は皆環境に適応し、強固な鎧を身に纏っている。

「ぎゃあッ!」

そこに突如響く、少年の絶叫。空からの落下物による爆音。周りにいた生物達はその音に驚き、ある者は空へ、ある者は溶岩の河に飛び込み逃げていった。

落下したモノは、一人の少年だった。黄金に輝く金髪、中世的な顔立ち、そして赤と蒼のオッドアイ。この世の美しさの代表とも言えよう容姿をした九歳程の少年であった。ただし、その表情は酷く歪んでいた。

頭からは血が流れ、額からは冷や汗が流れ、その顔には恐怖が張り付いていた。更には身に着けているバリアジャケットは所々がロボロに破れ、手に持つ金色の剣には亀裂が走っていた。

「に、逃げなきゃ・・・逃げなきゃ殺されるツ・・・！！」

少年はゴキブリのように地面を這う。そこにはプライドや誇りなどの言葉は一切ない。ただ逃げて、生き延びたい。生き恥を晒してでも逃げ延びたい。典型的な生物の本能だけがあった。

と、少年の目の前の地面に、二本の足が降り立ち、少年の顔はさーっと青ざめていった。

少年は恐る恐る顔を上げる。目に入ってきたのは、少年と同じくらいの身長がある人。右手には肉で出来ていると思われる、生々しくグロテスクな杖が握られていた。頭からフード付きのローブ服を着ているため容姿は認識できないが、フードの中からは二つの蒼い光がギラギラと光っている。

「ひっ、ひひやあああっ！！」

少年は手に持つデバイスを手から放し、『彼』に背を向けると四つんばいの状態でよたよたと逃げようとする。先程までは舐めて掛かっていた相手。しかし、そのような偏見はたったの一瞬で吹き飛ばされてしまった。だから、恐怖に煽られた少年に残された道は『逃げる』という手段しか残っていなかった。

『彼』は、映画の殺人ロボットのように、ゆっくり、ゆっくりと右足から、前に進む。そして、最初の一步で、少年が手放したデバイスを、グシャリ、粉々に踏み砕いた。ゆっくり、ゆっくりと、少年の死のカウントダウンを、一つ、一つ、切ってゆく。

少年は逃げる。今、自分がどれだけ無様な姿を晒しているなんて分らない。とにかく逃げたい。

彼は二度目の人生を魔法というチカラがあるこの世界に、自らが望んだ美しき姿で、自らが望んだ他者を圧倒する力を得て生まれ変わった。気に入らないモノは何であろうと潰してきた。自分以外の自分と同じような存在、そうでない最初からこの世界に存在する者も含めて、何人も葬ってきた。それ程までに少年の力は強力だった。それ故に、少年は恐怖という感覚を忘れていった。そして自尊心という感情は異常なまでに肥大していった。自分以外の者は弱い、自分が何時も正しい、自分こそが正義。

だからこそ、敗北した。自分より強い相手と戦ったことが無いという幸運は今日の不幸までの伏線にすぎないという事実は今更気付いた。

気付けば目の前には溶岩の河。逃げ道は無い。前に進むのが、後ろに下がろうが、どの道待っているのは死であろう。

少年は『彼』に向き、焦りながら右手を出す。

「まっ、待ってくれ降参だ！俺はもう原作介入しない！それに原作キャラやアンタの目の前にはもう現れない！それにアンタはまだ生きている！わ、分かるだろ？同じ転生者じゃないか……！」

少年は最後の賭けに出た。命乞い。通る確率はかなり低い大博打。しかし、少年には確証も根拠も無い自信があった。

（俺はオリ主なんだ！きつと主人公補正が効いて、俺はここで助かるんだ！）

少年の異常なまでに膨れ上がっている自尊心は、命が風前の灯になってもなお消える事は無かった。いや、自らの命が消えかかっているからこそ、その妄想は消えることは無かった。

『彼』はその歩みを止めた。少年の顔にみるみる血の気が戻っていく。そして確信した、自分は助かったんだと。

（助かったのか？助かったんだ！そうだ、俺はオリ主なんだ！助かって当然なんだ！そうだよ、オリ主にはいつもご都合主義が味方してくれ）

「ゴメン、何のことだか分かんないや」

「へ？」

『彼』の口から出てきた言葉に呆けた少年の胸に、『彼』の左手が突き刺さる。

「げはあつ！？」

少年の口からは鉄の香りがする熱い液体が吹き出し、『彼』の黄色いローブの袖を赤く染める。

うじゆり、うじゆり。『彼』は手を動かす。まるで、袋の中から手探りに物を探すように、ゆっくり、ゆっくりと、手を動かす。

『彼』が手を動かすその度に、少年の顔に苦痛の色が浮かび上がる。痛い、止めてくれ、助けて。痛い、止めてくれ、助けて。苦痛に悶えながらも、消えてしまいたいような弱々しい、ゆっくりとした声で、何度も、何度も、何度も、連呼する。

しかし、終わらない。『彼』は、苦痛に悶える少年の姿を楽しむでもなく、罪悪感があるでもなく、ただ淡々と、左手を動かす。

三十分程経ち、『彼』は少年の胸からズボツと手を引き抜く。しかし、血で赤く染まっている筈のその手は、血の赤ではなく、何か別の、光すら反射しない黒い液体に塗れていた。

『彼』が手を引き抜いた事で支えを失った少年の身体は後ろに倒れこんだ。胸には、『彼』の左腕を塗らしている液体と同じ、光のない闇が空いていた。そしてその左右別々の色を持つ瞳にも、既に光は宿っていなかった。

『彼』はどうでも良い物が偶然目に入り一瞬だけ気を取られたが、その視線を左手に移し、何かを握っている拳をゆっくりと広げた。そこには、水晶玉のような球体状の物があつた。その中には、『彼』

の腕を塗らす液体の黒とはまた違った黒い色の靄の様な物が絶えず流動していた。そして時折その靄は、苦痛に悶える人の顔の様な形になり、直ぐに崩れる。

『彼』は球体状の物を上に放り投げる。『彼』の右手に握られている杖に埋め込まれた目玉は突如ギョロリ動きとそれを見る。かと思うと、杖先の口がガバアツつと開き、落ちてきた球体状の物をバクリと食らい、再び口を硬く閉じた。

（これ位あれば内部エネルギーには十分。後は器、『悪意満ちぬ偏方面型の宝石』が必要・・・か）

『彼』は左手を塗らしている『黒い穢れ』を払い落としながら考える。

（ユゴスに行けば器たる鉱石を見つけるのが容易な事は分かる。ただ問題は箱、箱を何で作るか・・・か）

『彼』は杖を上投げる。杖は蛇のように蛇行したかと思うと、その大きさが小さくなり『彼』の腕にアクセサリー巻きつく。すると、生々しい赤色だった杖は金属光沢を放つ銀色へと変わった。まるで、シルバーアクセサリーの様だ。

（早いところ探さないと、時間がもう無い）

ひゅうつ、と風が吹いたかと思うと、『彼』はその場から忽然と姿を消した。後には、胸に底なしの闇が空いた亡骸が一つ残されただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3448ba/>

不幸の黄色い魔導師

2012年1月9日01時53分発行